

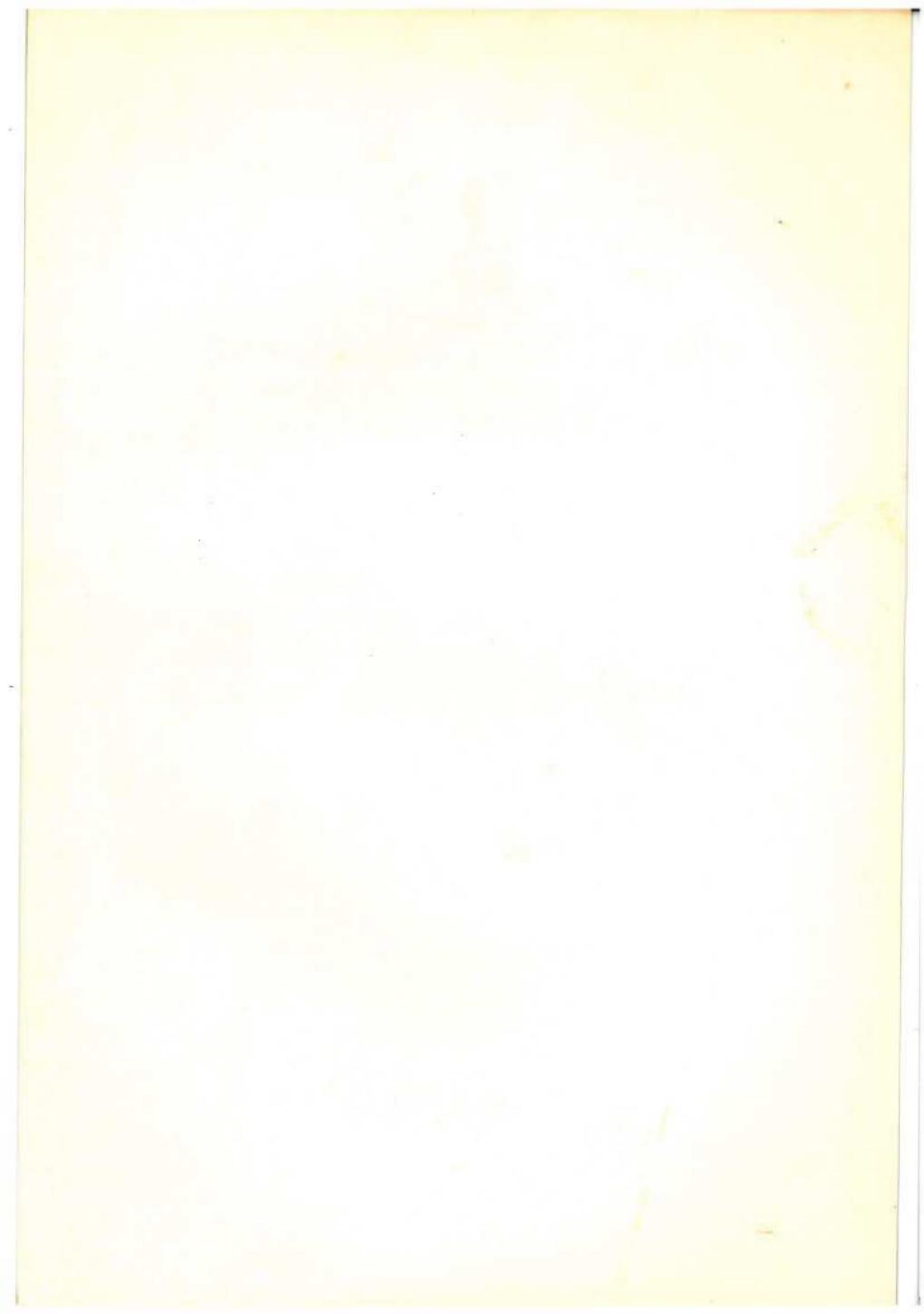
はら かわ い せき

原 川 遺 跡

原川市営住宅団地建て替えに伴う
緊急発掘調査報告書

1993

掛川市教育委員会



はら かわ い せき
原 川 遺 跡

原川市営住宅団地建て替えに伴う
緊急発掘調査報告書

1993

掛川市教育委員会

序

掛川市域は自然環境が豊かなことから古来より人々の生活が営まれ、その遺跡が至るところに残されています。私たちの今日の生活が先人たちの多くの労苦の積み重ねによって築かれていることを思うとき、先人への感謝とその生活の足跡である遺跡の保護や研究に心を寄せずにはいられません。

これらの遺跡を貴重な文化遺産として永く子孫に伝えるため、文化財保護法に基づき積極的にその保護と活用をはかることは私たちに課せられた責務です。しかし、現在の私たちの生活のため、あるいは将来の発展のためにやむを得ず、これらの貴重な遺跡を遺すことができない場合があります。できる限り現状保存することが望ましいのですが、事業内容によりどうしても現状保存できないものについては発掘調査を実施し記録保存の措置をとることになります。

このたびの発掘調査は、老朽化した市営住宅の改築に伴い、建設工事に先立ち実施されたものです。発掘調査にあたっては、建設主体者である市都市計画課と十分協議を重ね、周到な準備を経て実施されました。

発掘調査は慎重に行われ、その結果古墳時代後期の堅穴住居跡をはじめ奈良時代や平安時代の造構などが検出されました。この原川遺跡は掛川市内における原野谷川の下流の肥沃な平野の中にある、古代より交通の要所であり、広い範囲に様々な遺跡が包含されている地域です。今回の調査結果が郷土の古代の歴史の解明に役立ち、さらに掛川の市民をはじめ多くの方々の温古知新の心を豊かにする糧となりますよう願つてやみません。

最後に本書の刊行にあたり、関係者各位のご協力とご指導に対し厚くお礼申し上げます。

平成5年3月吉日

掛川市教育委員会

教育長 大 西 珠 枝

例　　言

1. 本書は、原川市営住宅団地建て替え事業（静岡県掛川市領家1608-1外）に先立ち、平成3年2月2日から同年2月22日（第1次）、平成4年8月27日から同年11月28日（第2次）の2カ年にかけて行われた埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、「掛川市原川市営住宅建て替え事業用地内埋蔵文化財発掘調査業務」として、掛川市役所都市計画課の依頼により、掛川市教育委員会が調査を実施した。
3. 現地の発掘調査は、第1次調査では掛川市教育委員会の戸塚和美が担当し、第2次調査では同教育委員会の大熊茂広が担当した。
4. 現地作業ならびに整理作業では、次の方々の参加を得ている。

山田繁治・長谷川勇次郎・戸塚英雄・青島信二・深田好徳・安間積・木村治郎・松井肇・松井田鶴子・榛葉たみ江・原田てい子・中村すま子・石川きみよ・松井しか・吉川幸子・吉川利子・平尾民子・戸塚春代・平尾なみ子・平尾民子・山崎よね・山崎さと・竹下千代・吉川きん・水口長治・水口いと・榛葉豊子
5. 現地調査ならびに本書作成にあたり、次の方々から御教示・御協力を得ている。

松井一明・加藤理文・榛原修二（順不同、敬称略）
6. 本書の編集は戸塚和美が行った。遺物実測・トレース・遺構のトレースは戸塚と大熊が分担しておこなった。執筆は目次に示したとおりである。
7. 発掘調査業務は、掛川市教育委員会教育長西ヶ谷兔志雄（平成4年9月31日まで）・大西珠枝（平成4年10月1日より）・社会教育課長榛葉稔・社会教育課参事岩井克允のもとに社会教育課が所管した。
8. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 挿図における方位は、磁北を示す。（1992年11月現在）
2. 本書で使用した遺構名称は下記の意味である。

S B：竪穴住居跡 S D：溝状遺構 S P：小穴
3. 本書で使用した遺構番号は、原則として現地調査時のものをそのまま使用した。
4. 遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
I 発掘調査と遺跡の概要〈戸塚〉	1
1. 調査に至る経緯と調査の目的	1
2. 調査の方法と経過	1
3. 遺跡をめぐる環境	2
II 調査の内容	5
1. 遺構〈大熊・戸塚〉	6
1) 基本層序	6
2) 遺構	6
①竪穴住居跡	6
S B 0 1	6
S B 0 2	11
S B 0 3	11
②溝状遺構	11
S D 0 1	11
S D 0 2	11
S D 0 3	13
S D 0 4	13
S D 0 5	13
S D 0 6	13
S D 0 7	13
2) 遺物〈大熊〉	15
1) 土器	15
2) その他の遺物	20
III ま と め〈戸塚〉	21

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図	3
第2図 遺跡の周辺地形図	5
第3図 遺構全体図	7
第4図 SB 01・03実測図(1)	9
第5図 SB 01・03実測図(2)	10
第6図 SB 02実測図(1)	12
第7図 SB 02実測図(2)	13
第8図 SD 03～05・ピット実測図	14
第9図 SD 07実測図	15
第10図 出土土器実測図(1)	16
第11図 出土土器実測図(2)	17
第12図 出土土器実測図(3)	18
第13図 出土土器実測図(4)・その他の遺物実測図	19

図版目次

図版I	上 第1面全景(東より) 下 第2面全景(東より)
図版II	上 第2面全景(西より) 下 重機掘削風景
図版III	上 SB 03完掘状況(西より) 中 SB 01・03完掘状況(北より) 下 SB 02・SD 06完掘状況(北より)
図版IV	上 SD 03・05完掘状況(南より) 中 SD 03～05・ピット群完掘状況(北より) 下 SD 07完掘状況(西より)
図版V	出土遺物(1)
図版VI	出土遺物(2)
図版VII	出土遺物(3)
図版VIII	出土遺物(4)
図版IX	出土遺物(5)

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と調査の目的

掛川市の原川地区にある原川市営住宅団地は、昭和36年に建てられたが、30有余年を経てかなりの老朽化が日立ちはじめてきた。掛川市では、この住宅老朽化に伴う劣悪な住宅環境の改善措置として、鉄筋コンクリート造りによる中層住宅への建て替えが計画された。

住宅建て替え用地を含むこの原川地区は、弥生時代から奈良・平安時代にいたる遺物を広範囲に散布する地域として早くからその存在が知られていた。原川市営住宅団地に隣接する国道1号線では、袋井バイパス（掛川地区）の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として昭和57年から昭和61年の5カ年にわたり静岡県埋蔵文化財調査研究所によって調査が行われた。その結果遺跡は大きな広がりを持つと共に弥生時代中期・古墳時代・奈良・平安時代・中・近世の各時代に特色を持った複合遺跡であることが判明した。

昭和63年に建て替え計画が具体化し、翌平成元年6月から掛川市役所都市計画課と掛川市教育委員会とで遺跡の取り扱いについて協議が開始された。その後協議を重ね、調査方法については、盛土以下の緑地・駐車場部分は現状保存されることになり、地下遺構に影響を及ぼす2棟の鉄筋コンクリート造り建物部分を調査対象とすることになった。調査開始時期については、当時、総戸数32戸の内約半数に在住者がおり、そのため同時に2棟の建て替え工事ができないことから平成3年度に東側の1棟、平成5年度に西側の1棟をそれぞれ別年度に建設し、埋蔵文化財発掘調査はそれぞれの建設の前年度に行うことになった。

今回の発掘調査事業は、上記の経緯に基づき記録保存を目的として行われた。

2. 調査の方法と経過

1) 発掘調査の方法

建て替え用地は周知の遺跡であると同時に、前記のように過去に隣接地で国一バイパス関連の調査が行われており、遺跡の遺存状況、特に土層堆積状況・包含層の有無については過去の調査データを参考とし、遺構面は3～4面存在すると考えられた。

遺構面までの表土（盛土を含む）が厚いため重機で表土除去を行った後、人力による掘削・精査し各遺構面の遺構を検出した。遺物包含層については人力による掘削を行った。

調査にあたっては、調査区の形に合わせ5m方眼のグリッドを設定し、遺構等の平面実測を行った。遺構は検出された順に遺構番号を付し、遺物はその遺構ごともしくはグリッド単位で取り上げた。

現地での図面作成は20分の1縮尺を基本とし、遺物の出土状態・土層断面図は10分の1縮尺で作成した。

写真撮影はプロニーサイズ〔6×7〕原画（白黒）、35mmサイズ原画（白黒・リバーサル）を併用した。

2) 経 過

- ・第1次調査（平成3年1月17日～2月22日）

1月17日～1月19日 機材搬入、安全柵の設置

1月20日～1月25日 重機による盛土掘削、排土運搬
1月26日～2月5日 遺構確認、試掘グリッド掘削、調査区測量、写真撮影
2月6日～2月9日 重機による掘削
2月12日～2月22日 遺構確認、試掘トレンチ掘削、調査区測量、写真撮影
現地撤収作業

・第2次調査（平成4年8月27日～11月28日）
8月27日～8月31日 機材搬入、安全柵の設置
9月3日～9月5日 重機による盛土掘削
9月6日～10月11日 グリッド設定、遺構確認精査
10月12日～10月16日 第1面遺構検出、遺構掘削、写真撮影、実測作業
10月17日～11月2日 包含層掘削、遺構確認精査
11月4日～11月19日 第2面遺構検出、遺構掘削、写真撮影、実測作業
11月20日～11月22日 試掘トレンチ掘削
11月23日～11月28日 重機による掘削、写真撮影
現地撤収作業

3. 遺跡をめぐる環境

1) 地理的環境

掛川市内から国道一号線を西に向うと袋井市との市境である原野谷川に至る。その原野谷川東岸一帯に原川遺跡は位置する。

原野谷川は市内の北端の八高山に源を発し、西ノ谷川と合流後蛇行をくりかえし各所に河岸段丘・沖積地を形成しながら本遺跡付近に至る。本遺跡は原野谷川の形成した沖積地に立地するが、北西では各和丘陵の南端の段丘が現在の原野谷川の右岸にせまる。この段丘が終わるや否や原野谷川は、流路を直進するかたちで南西に急変する。現在の原野谷川とその支流である逆川、垂木川は大正から昭和にかけて改修されたものであるが、現在でも旧蛇行流路跡を確認することができる。原川遺跡の北側では現在よりも東に大きく蛇行していたことがわかる。

旧流路は現地に残るその痕跡や地形図の等高線の検討などからも推定できるが、近年では発掘調査によってそれまで知られることがなかった古代の流路が確認されるようになった。例えは隣接する坂尻・梅橋北遺跡でも発掘調査によって埋没河川（自然流路）が検出されている。ここ原川遺跡でも古墳時代後期を中心に平安時代後期頃まで存在したと考えられる自然流路と、更にその下層には弥生時代中期にまで遡る可能性のある自然流路が検出されている。いずれも旧原野谷川の支流と考えられるが、本流であった可能性もあるとしている。いずれにせよ等高線の張り出しからも旧原野谷川は現流路よりも東を蛇行していたと考えられる。

蛇行流路を発達させるこれらの旧流路は、蛇行の弧の内側に自然堤防をよりよく形成している。そして自然堤防の標高16～17m付近の微高地にこそ遺跡が立地するという指摘のごとく、原川遺跡については各和丘陵の南端と東に大きく蛇行する旧原野谷川によって形成された自然堤防上に立地している。また遺跡の立地する自然堤防と、その南東を流れる逆川の自然堤防にはさまれた垂木川流域は、遺跡の立地からすると極めて安定性を欠く後背低地が形成される。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

遺跡地名

1. 原川
2. 梅橋北
3. 三ツ池
4. 善光寺
5. 篠場
6. コリトリ
7. 黒田
8. 津田
9. 細田
10. 大池
11. 前坪古墳群
12. 前坪
13. 浅間神社古墳群
14. 東照ケ谷古墳群
15. 本村横穴群
16. 屋敷越横穴群
17. 屋敷越古墳群
18. 領家
19. 曾我後
20. 平野
21. 梅橋
22. 徳泉
23. 坂尻
24. 原川城
25. 宇佐八幡宮古墳群
26. 山下
27. 鶴松
28. 岡津原Ⅲ
29. 岡津原Ⅳ
30. 岡津原Ⅱ
31. 梓貨横穴群
32. 梓貨古墳群
33. 旗指古墳群
34. 岡津原Ⅰ
35. 高代山古墳群
36. 高代山脊
37. 山崎
38. 土橋横穴群
39. 長沢古墳群
40. 富部古墳群
41. 椿田谷古墳群
42. 枕田古墳群
43. 富部城・二反田
44. 富部
45. 森平
46. 森平城
47. 赤瀬南
48. 赤瀬
49. 桶田
50. 蟹沢古墳群
51. 堂前
52. 鰐原横穴群
53. 飛鳥横穴群
54. 小島
55. 藏人古墳群
56. 藏人
57. 小山平
58. 源ヶ谷
59. 六ノ坪

2) 歴史的環境

ここでは「地理的環境」でふれた原野谷川・逆川が形成した自然堤防上に展開した遺跡について概観してみたい。原川・梅橋北遺跡をはじめとする原野谷川流域の沖積地に遺跡の形成が開始されるのは、今のところ弥生時代中期初頭と考えられている。原川遺跡では弥生時代中期初頭（丸子式）段階の掘立柱建物群と土器棺墓群が検出されており、遠江における水稻耕作開始の一指標と考えられている。原川遺跡に隣接する梅橋北・坂尻遺跡では、水稻耕作開始を示す明確な資料はないが、弥生時代中期中葉段階の土器を出土している。

原川遺跡の東、逆川流域に展開する領家遺跡は、遠江地方の弥生時代後期の標式遺跡として1930年代より注目を集めてきた遺跡である。しかし、その重要性はそれ以後も認識され続けたが、遺跡の周辺部での発掘調査がほとんど行われなかつたため遺跡の範囲、時期をはじめとする実態については1930年代以降ほとんど不明瞭のままである。昭和62年に国一バイパス関連の調査によってメスが入れられたが、調査地点は包含層にはあたらなかった。過去、周辺地で採集された遺物の検討によれば、中期中葉（巒田式）から後期（菊川式）に及び、特に弥生時代中期後葉（白岩式）を主体とする遺跡と考えられる。また、弥生時代中期の良好な資料を包蔵する遺跡であるとともに、市内では弥生時代後期から古墳時代前期にはほとんどの遺跡が台地上に立地するなかで、数少ない沖積地に立地する遺跡として再認識されている。

古墳時代中期でも集落形成の舞台は台地上であるが、梅橋北遺跡では該期の遺物を伴った旧流路が検出されている。

古墳時代後期には原川・坂尻遺跡などで大規模な集落が展開される。原川遺跡では掘立柱建物・堅穴住居などともに造り出し部を持った円墳が検出されている。墳丘は既に削平されていたが、周溝内からは5世紀末葉から6世紀前半に比定される須恵器とともに円筒埴輪・家形・人物埴輪などが出土している。当集落の首長墓と考えられるわけであるが、6世紀には墳丘をもった古墳から横穴への墓制変換が起り、やがて横穴が墳丘をもった古墳を完全に凌駕する当該地域にあってはその存在は異彩を放っており、墓制変換として具現化する政治変動の中での位置づけは今後注目されよう。

奈良時代から平安時代にかけては、検出された多数の掘立柱建物群・墨書き土器、その他和銅鏡・帶金具などから佐野郡衙跡と考えられる坂尻遺跡を中心とした集落の展開が、原川・梅橋北遺跡にもみられる。特に原川・梅橋北遺跡出土の平安時代の遺物には、灰釉陶器・綠釉陶器・硯・墨書き土器などの官衙的色彩が色濃くみられ、該期の郡衙機能の一役を担っていたと考えられる。

中世、鎌倉時代には曾我に小松厨が、室町時代には曾我庄が成立したとされるが、位置など具体相については不明である。原川・領家遺跡などで若干の山茶碗を出土するが、遺構は検出されていない。

中世末から近世初頭にかけて、原川遺跡は再び賑わいをみせる。戦国期には、原川大和守が文亀年間（1501～1504）に北原川の原川城を築いている。原川遺跡では該期の掘立柱建物がこの原川城寄りに集中しており、居館を中心とした自然村落という構図が示唆されている。近世初頭の集落が原野谷川の支川を埋め立てて形成されていることが発掘調査によって確認されており、戦国期の自然村落に対し、慶長検地以降「原川町」・「原川宿」として成立するような計画的につくられた在郷町であったと考えられている。

近世以降、街道東海道の発達とともに「立場」が成立し、油屋・駄屋・錆掛屋などの生業も営まれるが、間の宿ゆえ「町場」としての発展はなかった。街道を媒介にしながらも在郷町としての要素が強い町であったと考えられる。出土遺物には肥前・瀬戸・美濃産をはじめ、地元の初山・志戸呂焼などの多くの陶磁器があり、当該期のそれらの流通を考える上でも重要である。



第2図 遺跡の周辺地形

II 調査の内容

今回の用地内での調査対象地は、地下遺構に影響を及ぼす2棟の鉄筋コンクリート造りの建物部分約700m²である。

東側建物部分の第1次調査では、遺構を伴った文化層は全く検出されず古墳時代後期の遺物を僅かに含んだ包含層が検出されたのみであった。遺物の量も非常に少なく、土師器・須恵器片がコンテナ1杯程度であった。よって第1次調査の内容は基本土層の項目でふれる。

西側建物部分の第2次調査では、奈良・平安時代の溝状遺構、古墳時代後期の竪穴住居などが検出された。以下、遺構・遺物の順に説明していく。

1. 遺 構

1) 基本層序

過去の調査によれば、弥生時代中期から中・近世にわたって遺構が検出されているが、各包含層は削平のため薄く、特に古墳時代以降は同一面で検出されている。基本的には、原野谷川の自然堤防上に位置する西部は各時期の遺構が比較的多量に検出されるのに対し、東に向かうにしたがって傾斜し旧流路や垂木川の影響を受けた後背低地になり遺構は検出されなくなる。

バイパス調査の基本土層と対比させながら基本層序を説明する。ローマ数字はバイパス調査の層序番号を示す。

- | | | |
|-----|--------------|--|
| 第1層 | 住宅の盛土と旧水田耕作土 | 層厚80cm、第Ⅰ層。 |
| 第2層 | 明灰色粘土層 | 層厚20cm、第Ⅱ層、班鉄・マンガン粒を含む。 |
| 第3層 | 暗灰色粘土層 | 層厚30cm、第Ⅳ層、上層に奈良・平安時代の遺物包含層が形成される。 |
| 第4層 | 黄褐色粘土層 | 層厚30cm、第Ⅴ層、上層に古墳時代後期の遺物包含層が形成される。2区の遺構はこの包含層直下で確認される。 |
| 第5層 | 淡黄褐色粘土層 | 層厚40cm、第VI層、粘性が強い。遺構・遺物は検出されない。 |
| 第6層 | 黄褐色粘土層 | 層厚30cm、第VII層、炭化物が少量含まれる。土器小破片（弥生時代？）が検出される。 |
| 第7層 | 青灰色粘土層 | 第VIII層、粘性が強い無遺物層。1区では植物遺体を含んだスクモ層、シリト・礫（旧流路？）が確認されている。 |

2) 遺 構

① 竪穴住居跡

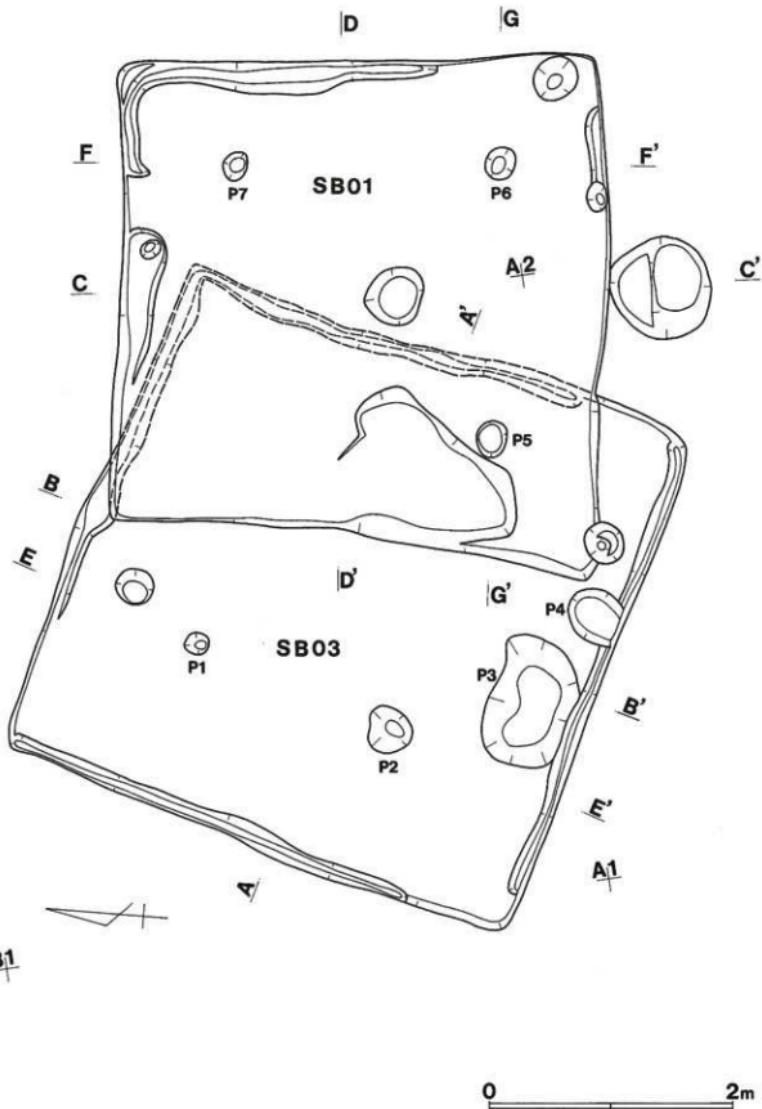
S B 0 1 (第4・5図)

S B 0 1は、A・B-2・3グリッドに位置し、S B 0 3と切り合う。新旧関係は、土層観察より本住居が古いことを確認している。ほぼ正方形で一辺4m、平面積は16m²である。確認面からの深さは10cmを測る。床面についてはすでに削平され、検出されたのは堀り方と考えられる。そのため炉・窓は検出していない。

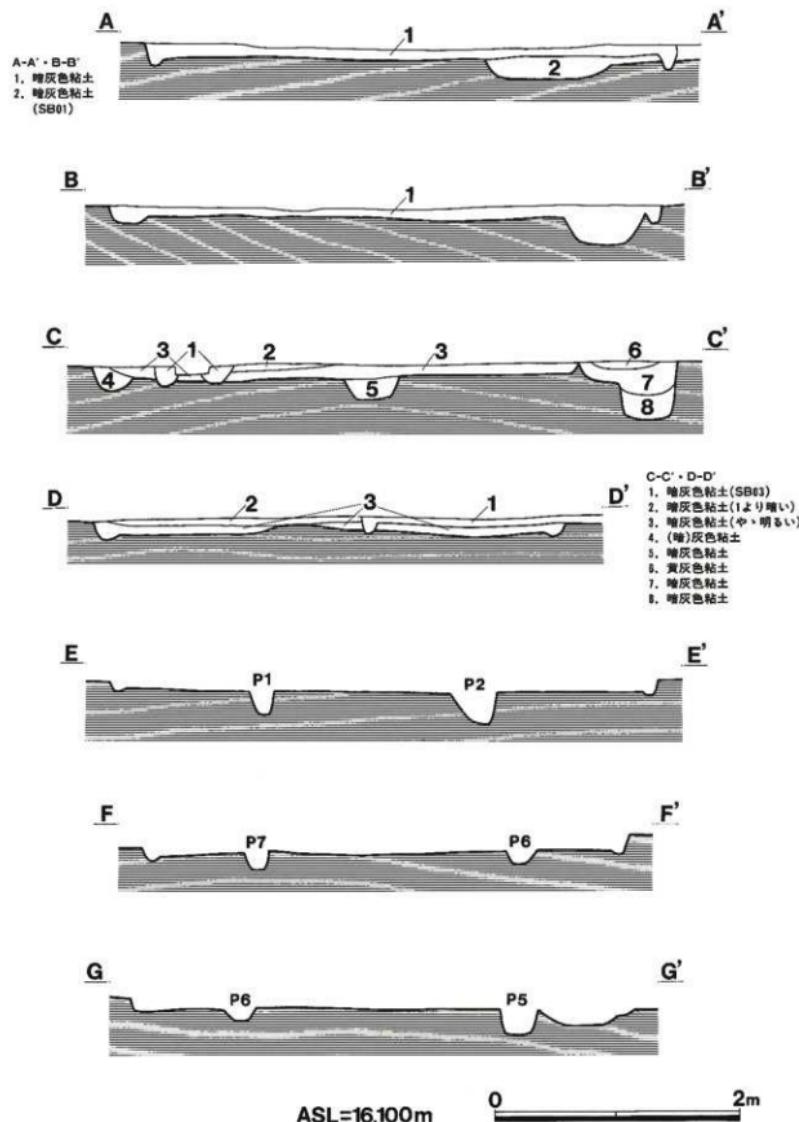
柱穴と考えられるものを3基検出しており、P 5は径30cm、深さ20cm、P 6は径30cm、深さ10cm、P 7は径25cm、深さ15cmをそれぞれ測る。



第3図 造構全体図



第4図 SB01・03実測図(1)



第5図 SB01・03実測図(2)

壁溝は検出し得た限りでは全周していないが、堀り方面より上では全周していた可能性が高い。S B 0 3 も同様の可能性がある。

出土遺物は土師器・須恵器の小破片である。出土遺物より 6 世紀前葉と考えられる。

S B 0 2 (第 6 ・ 7 図)

S B 0 2 は、調査区東隅、A・B-4・5 グリッドに位置する。南・東壁は調査区外へ及ぶため規模は不明だが、今回確認できた大きさでは一辺約 5.5m を測ることから S B 0 1・0 3 に比べ大型である。S D 0 6 に切られる。

確認面からの深さは 10cm を測る。床面については、前記の住居同様堀り方面であるため炉・竈は検出していない。

ピットは 3 基確認しているが、その内柱穴と考えられるものは P 2 (径 60cm、深さ 20cm) で、その他ものについては堀り方の一部と考えられる。

壁溝は南壁と西壁の一部で確認している。

出土遺物は土師器・須恵器の小破片である。出土遺物より 6 世紀中葉から後半と考えられる。

S B 0 3 (第 4 ・ 5 図)

S B 0 3 は、A・B-2 グリッドに位置し、S B 0 1 と切り合う。新旧関係は、土層観察より本住居が新しいことを確認している。ほぼ正方形で一辺約 4.5m、平面積は約 20.3m² である。確認面からの深さは 5~10cm を測る。

床面については、硬化面がなく炉・竈を検出していないことから、今回検出したのは掘り方面であり、本来の床面は確認面より上にあったと考えられる。

P 1・P 2 は柱穴と考えられる。P 1 は径 20cm、深さ 20cm、P 2 は径 40cm、深さ 25cm を測る。南壁際の P 4 はその規模 (110×50cm、深さ 25cm)、存在する位置などからみて貯蔵穴と考えられる。土師器片が出土している。

壁溝をもつが全周せず、北西、南西、南東のコーナーで 80cm づつ途切れる。

出土遺物は土師器・須恵器の小破片である。出土遺物より 6 世紀前葉と考えられる。

②溝状造構

S D 0 1 (第 3 図)

この S D 0 1 と S D 0 2 が、第 1 面における検出造構のすべてである。

S D 0 1 は、調査区中央寄り、A-C-4 グリッドを南北にはしる溝である。小さな蛇行を繰り返すが概ね直線的である。幅は 0.5~1.2m、深さ 10~15cm を測る。断面形は弓形を呈す。

覆土は暗灰色粘土で班鉄を非常に多く含んでいる。

遺物は土師器小破片が少量出土しているが、時期・器種ともに不明である。

S D 0 2 (第 3 図)

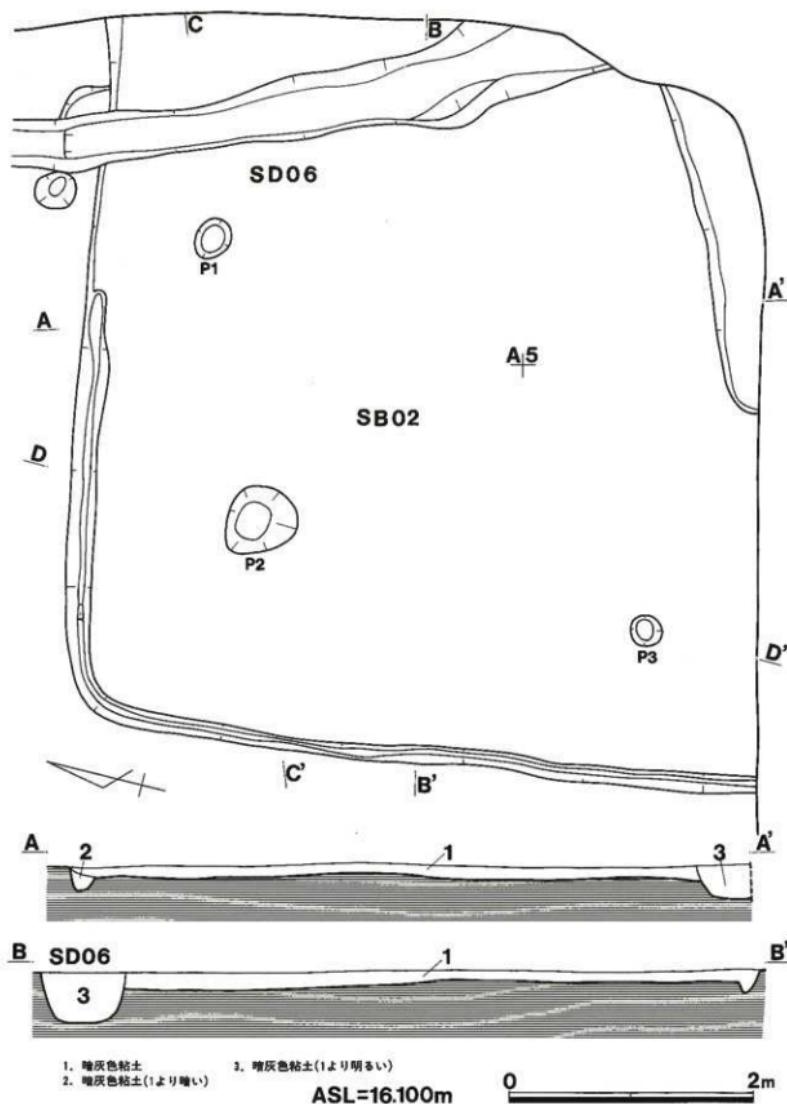
S D 0 2 は、調査区南側、A-1~6 グリッドを東西にはしる溝である。ほぼ直線的にはしり、A-4 グリッドにおいて途切れるが、精査中にその痕跡が確認されたため同一の講と判断できる。幅は 30~60cm、深さは 5~7cm を測り、断面形は弓形を呈す。

遺物は土師器小破片が少量出土しているが、時期・器種ともに不明である。

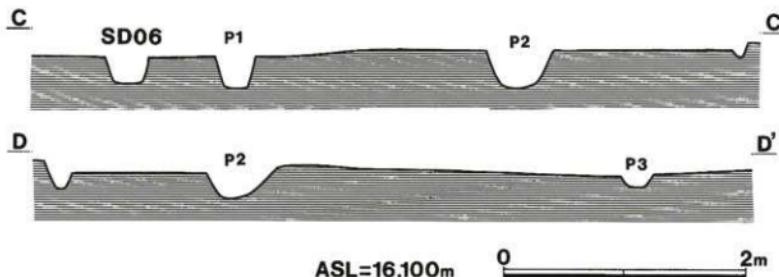
S D 0 1 とは、A-4 グリッドにおいて交差するが、切り合うのか、それとも合流するのかは明確にできなかった。

S D 0 3 (第 8 図)

A・B-3、B・C-4 グリッドを北東から南西にほぼ直線的にはしる溝である。S D 0 4・0 5



第6図 SB02実測図(1)



第7図 SB02 実測図(2)

に切られている。

幅40cm、深さ10cmを測る。わずかではあるが北から南への傾斜がみられる。

覆土は、炭化物を少量含んだ暗灰色粘土である。

遺物は、ほとんどなく時期は明確にし得ないが、切り合い関係にあるSD04が出土遺物より6世紀後半と考えられることから、概ね同じ時期もしくは若干遡るものと考えられる。

SD04 (第8図)

調査区北壁に沿って検出された。北側の立ち上がりは調査区外へのびるため幅は不明であるが、長くほぼ直線的に続くことから溝と判断した。

深さは50cmを測り、わずかではあるが西から東への傾斜がみられる。

遺物は、土師器・須恵器の小破片が少量出土している。出土遺物より6世紀後半と考えられる。

SD05 (第8図)

調査区のほぼ中央、A～C-1～3区をほぼ南北にはしる溝である。

幅70cm、深さ50cmを測り、ほぼ直線的に伸びる。断面形はU字形を呈す。

遺物は、土師器の小破片が少量出土しているが、時期・器種については不明である。SD04との重複関係は、土層観察では明確にし得なかったが、深さなどの規模に共通点がみられることから切り合はず合流していたものと考えられる。

SD06 (第3・6図)

調査区東端A～C-1～3グリッドに位置し、緩やかに弧を描きながら南北にはしる溝である。SB03・SD06を切っている。

幅40～80cm、深さ10～30cmを測り、断面形はU字形を呈す。北から南に緩やかに傾斜している。

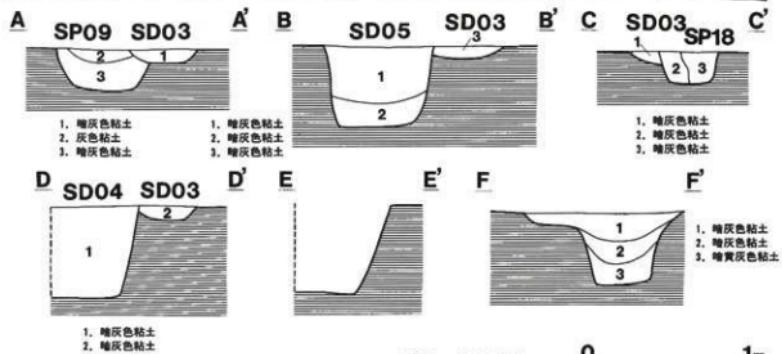
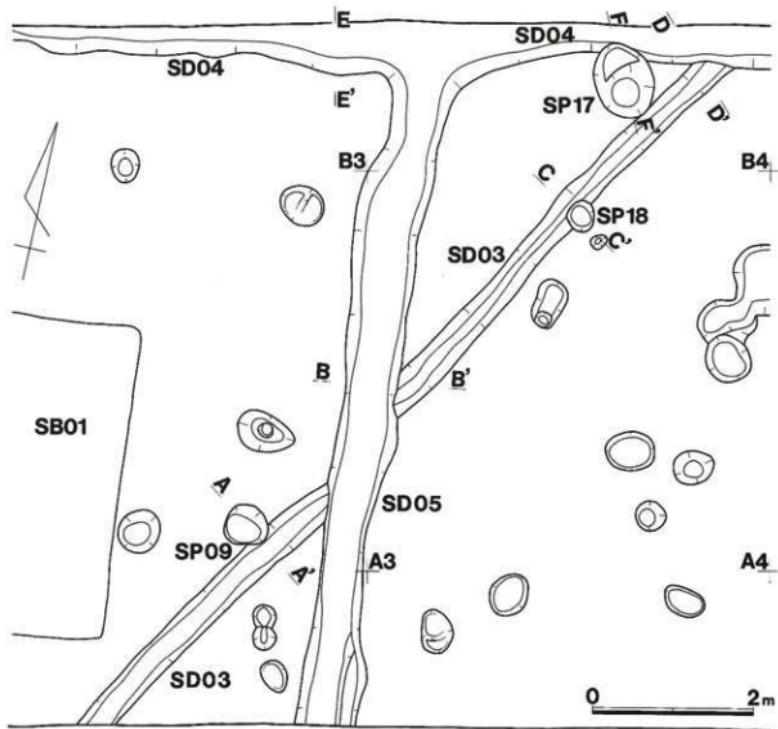
遺物は、土師器・須恵器の小破片が出土している。出土遺物より6世紀後半と考えられる。

SD07 (第9図)

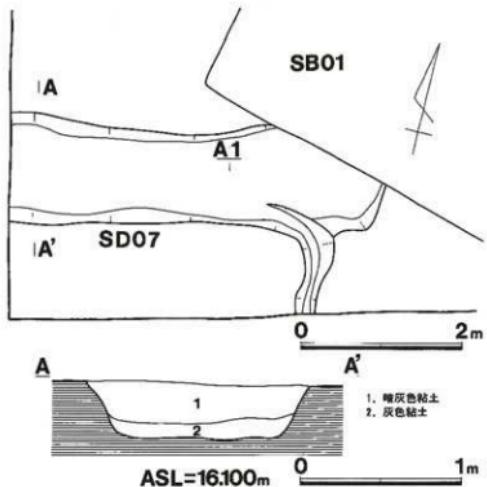
調査区南西隅、A・B-1・2グリッドに位置する。SB01と切り合うが新旧関係は明確にできない。途中から細く浅い溝が派生するが、新旧関係は不明。

幅1.2～1.4m、深さ西側では35cmを測るが、東へいくにしたがって浅くなることからSB01とぶつかるあたりで立ち上がるものと考えられる。

遺物は、土師器・須恵器の小破片が出土している。出土遺物より6世紀後半と考えられる。



第8図 S D 0 3 ~ 0 5 • ピット実測図



第9図 SD07 実測図

2. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器・土製品・石製品・獸骨である。総量としては、決して多いものではないが、國化に耐え得るものは可能な限り図示し掲載した。

1) 土器 (第10~14図)

出土土器は、古墳時代後期に属する須恵器と土師器が大半を占める。以下番号順に説明していく。

1~3は、SB01出土の須恵器环身である。いずれも残存率1/2以下の破片である。1は推定最大径13.1cmを測る。2は推定で口径12.5cm、最大径14.2cmを測る。3は推定で口径10.9cm、最大径10.2cmを測るいずれも口縁部の立

ち上がりの内傾は弱く、端部でやや外反しそこに段がみられる。1・2は薄手なつくりになっているが、3の受部は肥厚しておりシャープさに欠ける。

4~8は、SB02出土土器である。4は須恵器环身片で、推定口径10.5cm、最大径12.8cmを測る。内傾して立ち上がる低い口縁部と断面三角形の受部を有す。5・6は土師器壺の口縁部片である。6の口縁部の屈曲は、他のものに較べ緩い。外面とも器面荒れが著しい。7・8は土師器碗である。7は推定で口径11.6cm、最大径14.6cm、8は口径11.1cm、最大径14.5cmを測る。どちらも口縁部がやや内傾する。

9~11は、SB03出土の土師器壺口縁部片である。10の口縁部内面と頸部外面にはハケ目が確認できる。

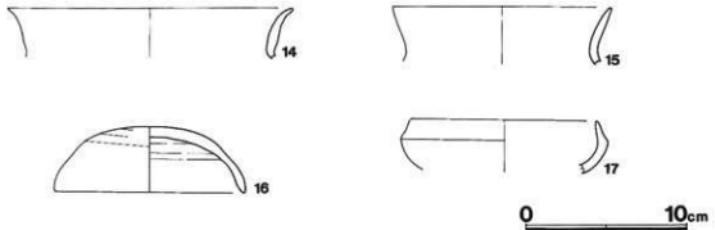
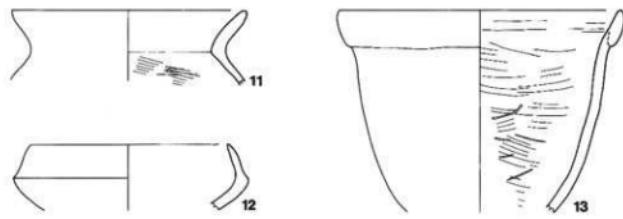
12~15は、SB04出土土器である。12は土師器模倣環片で、推定口径12.3cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がり、受部は稜になっている。13は土師器壺であるが底部を欠く。口径は推定で17.2cmを測り、折り返し状になっている。外面の調整は不明であるが、内面にはハケ目痕が残る。14・15は土師器壺の口縁部片である。14の口唇部は外反する。

16~17は、SD06出土土器である。16は須恵器环蓋で、推定口径11.8cm、器高4.05cmを測る。天井部から口縁部まで緩やかに内湾するカーブを描く。17は土師器模倣环片で、推定口径11.5cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がり、受部は稜になっている。18は土師器壺の頸部から肩部にかけての破片である。頸部の屈曲は弱くほぼ直立に立ち上がる。19は土師器壺の口縁部片である。口縁の屈曲は弱い。20は土師器壺の胴下部である。底径10.5cmを測る。胴は直線的で底部に至る。外面は器面荒れが著しいが、内面にはハケ目が確認できる。

21はSD07出土の壺の底部片である。底径は推定で8.2cmを測る。

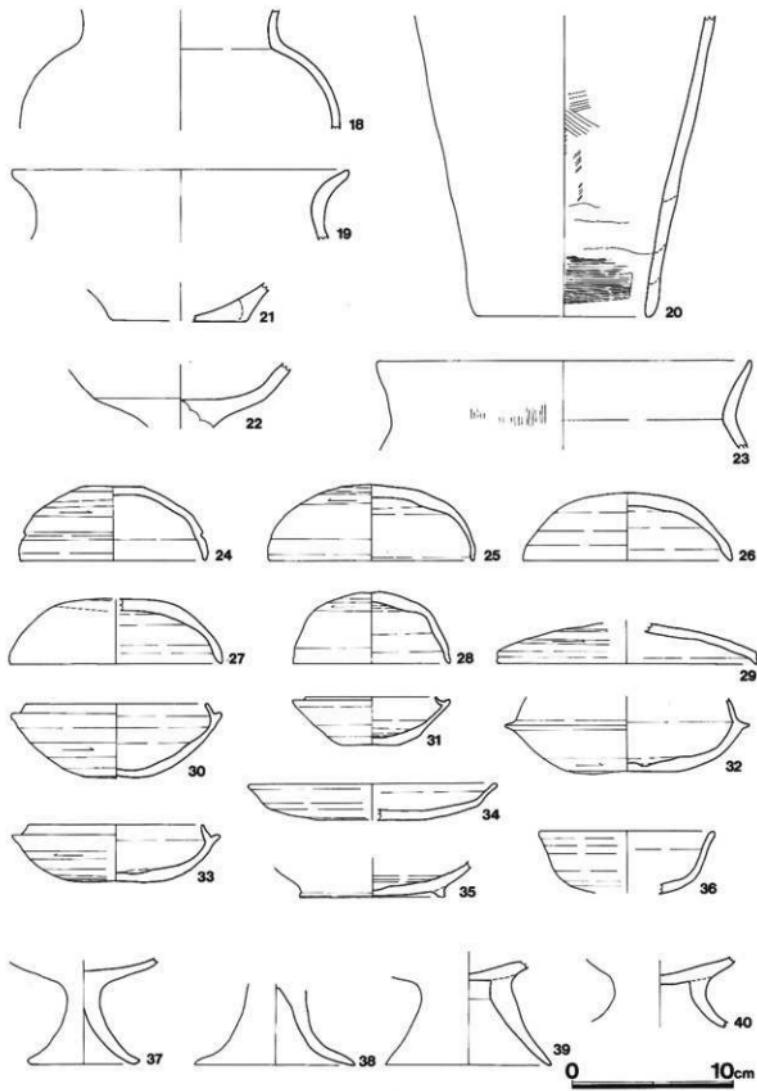
22はSP33出土の土師器高环片である。外面には弱い稜がみられる。

23はSP20出土の土師器壺口縁部片である。緩やかに屈曲する頸部外面にはハケ目が認められる。

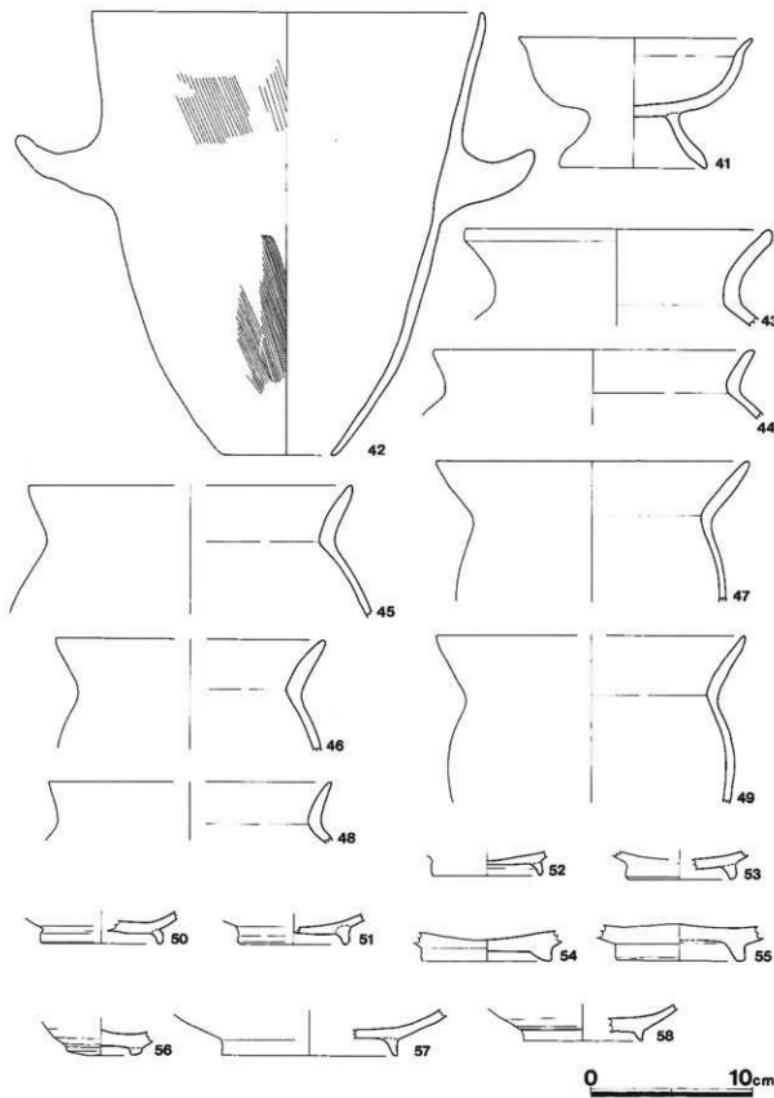


0 10cm

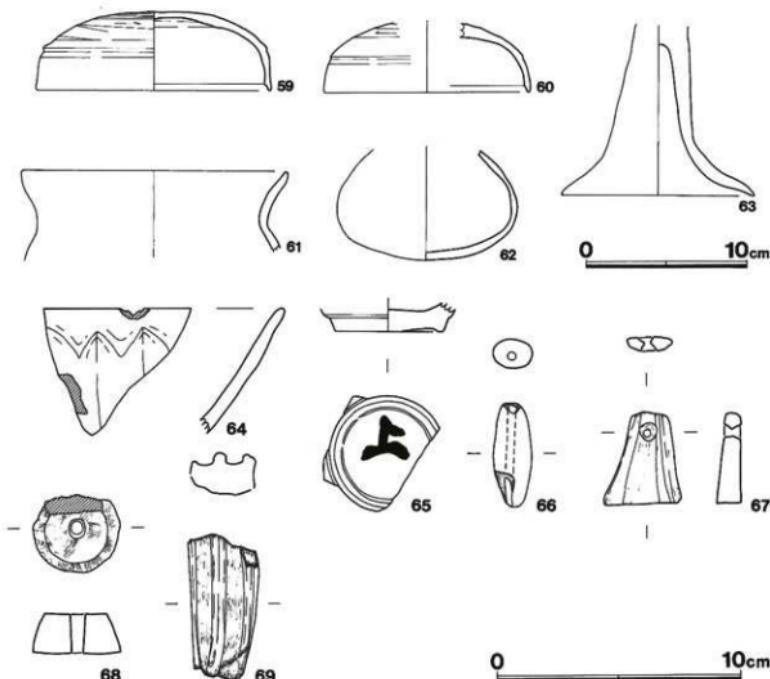
第10図 出土土器実測図(1)



第11図 出土土器実測図（2）



第12図 出土土器実測図 (3)



第13図 出出土器実測図(4)・その他の遺物実測図

24以降は遺構外出土である。24～29は須恵器坏蓋である。24は口径11.5cm、器高4.6cmを測る。天井部は平坦で、沈線化した稜が口縁部に施される。25は口径12.7cm、器高4.7cmを測る。天井頂部から内湾して口縁部に至る。26は口径13.05cm、器高4.0cmを測る。天井部より緩やかに内湾して口縁部に至る。27は推定口径13.2cm、器高4.0cmを測る。形態は26と同じである。28は口径9.8cm、器高4.4cmを測る。他の中には較べ口径の割に器高が高い。29は推定口径16.2cmを測る。欠損しているが宝珠形のつまみが付くものである。

30～33は須恵器坏身である。30は口径11.2cm、最大径13.1cm、器高4.6cmを測る。口縁部は短く、受部は肥厚してシャープさに欠ける。31は口径8.2cm、最大径9.8cm、器高2.9cmを測る。口縁部は短く、受部との差も少ない。受部は肥厚している。32は最大径15.3cmを測る。口唇部を欠くが口縁部は緩やかに内湾して立ち上がる。受部は羽釜の鉢状を呈す。33は推定口径10.8cm、最大径13.0cm、器高3.55cmを測る。口縁部・受部ともに断面三角形を呈す。34はである。推定口径15.6cmを測る。口縁部はやや外反して大きく開く。35は高台付坏身の底部片である。底径9.0cmを測る。36は蓋付無高台の坏身である。口径11.0cmを測る。口縁部は外反して立ち上がる。

37～40土師器高坏脚部片である。38のように裾部が大きく聞くもの、39のように直線的に聞くもの

がある。41は口縁部を若干欠損するが、推定口径14.4cm、器高8.0cm、底径9.0cmを測る。坏部は丸く張り出しており、口縁部は外反する。脚部はほぼ直線的に開く。

42は土師器甕である。胴下半部を1/2程欠く。口径24.3cm、推定底径6.6cm、器高27.3cmを測る。直胴形であるが、胴下半はやや内湾を強める。器面荒れが著しいが、外面にはハケ目が確認できる。

43~49は土師器甕である。いずれも口縁部から肩部にかけてのものである。43の口縁部は口唇部に担面が設けられるが、ほかはいずれもシャープなつくりになっている。また46・47・49は肩部が張り出さないタイプのものである。

50~53は灰釉陶器底部片である。50は三日月高台であるがかなり退化している。51は三角高台である。52は底部に回転糸切り痕を残し、三角高台を付けている。53も三角高台であるがシャープさに欠ける。

54~58は山茶碗の底部片である。54は底部に回転糸切り痕を残し、三角形高台を付けている。55は台形高台を付けている。56は高台の取り付けが雑で、低くつぶれている。57・58は東遠江系で、どちらも鋭角な三角形高台を有す。57は回転糸切り痕が残るが、58はナデ消されている。

59~63は第一次調査（平成2年度）出土遺物である。

59・60は須恵器坏蓋である。59は口縁部を若干欠くが、口径14.4cm、器高4.8cmを測る。天井部は丸味をもち、約1/2にへラ削りが施される。肩部にはやや沈線化した稜をもつ。口縁部は直垂し、その端部にも稜をもつ。60は天井部を欠いており、推定口径12.8cmを測る。口縁部はやや内傾しながら垂下し、肩部には沈線化した稜が認められる。口縁端部にも稜をもつ。

61は土師器甕の口縁部片である。頸部の屈曲は緩やかで、口縁部はやや内湾しながら外傾する。

62は土師器甕の胴部片である。やや下膨れ気味の胴部に最大径をもつものと思われる。63は土師器高环脚部片である。直線的な脚部から裾部は屈曲して大きく広がる。

64は綠釉陶器碗の口縁部片である。素地は灰色硬質で、釉は淡黄緑色を呈す。外面には鋸歯状に連続する花紋（蓮弁か？）が施される。

65は施釉陶器の高台杯碗の高台部である。内面には鉄釉を施釉しており、底部外面には「上」の墨書きがある。

2) その他の遺物（第13図）

67以外はすべて遺構外出土である。

66は管状土錐である。両端を欠いており、摩滅が著しい。現存長4.25cmを測り、中央部が膨らんだ樽形で断面形は梢円形を呈す。

67はS D 0 5出土の性格不明の石製品である。石材は緑色泥岩で、明緑灰色を呈す。長さ4.85cm、長幅3.15cm、短幅1.5cm、厚さ0.65~0.95cmを測り、撥形のような台形を呈す。穿孔は両側穿孔である。石製模造品とも考えられるが、何を模したものかは不明である。

68は滑石製の紡錘車である。1/3程を欠損する。上面直径3.65cm、下面直径3.65cm、高さ1.6cmを測り、断面形は台形を呈す。表面には細かい擦痕が放射状にみられ、端部の一部には鋸歯文が確認できる。

69は馬の歯である。両端部を欠き片側のエナメル質も剥離している。

III まとめ

今回の調査では、平成4年度の調査区において遺構面が2面検出された。ここでは時期、遺構の性格等が比較的明確な古墳時代後期の遺構について、過去に周辺地で調査された遺構との関連づけし、まとめとしたい。

坂戸・原川・梅橋北遺跡をはじめとする原野谷川流域の沖積地に立地する古墳時代後期の集落については、近年の調査件数増加とともに広範囲に及ぶ調査によって、その集落規模もかなりの広範囲に及ぶことが明らかになりつつある。

今回の調査により検出された竪穴住居は、6世紀前葉に比定されるSB01・03と、6世紀末葉に比定されるSB02の3軒である。国一バイパス関連の調査では、今回の調査区の北東100mの地点において、5世紀末から6世紀前葉の竪穴住居が発見されている（静岡県埋蔵文化財調査研究所1989）。原川遺跡でこれまでに発見された5世紀末から6世紀前葉の竪穴住居には、竈も炉も検出されていない。いずれの住居跡も検出時の深さが5～10cm程度と決して良好な状態とは言えず、床面はすでに削平されていたために炉は検出されなかつたのであろう。今回検出し得たのは、床面より下の掘り方までの部分と考えられる。竈についても、仮に本来これらの住居に竈が造られていたとすれば、たとえ掘り方とは言え何等かの竈の痕跡は残るはずである。とすれば当初より竈は造られていなかったと考えられる。

近年、原川遺跡より原野谷川を隔てた西岸に展開する坂戸遺跡では、6世紀前半の竈をもった竪穴住居が発見され調査を追うごとにその数が増している（静岡県埋蔵文化財調査研究所1989・1990、袋井市教育委員会1991・1992）。6世紀前半の竈のある竪穴住居と竈のない竪穴住居についてもう少し詳しくみてみよう。出土土器、特に須恵器からその年代観を細分すると、原川遺跡でこれまでに発見された竪穴住居は、川江編年Ⅰ期（陶邑窯TK23・47併行期）から川江編年Ⅱ期（陶邑窯MT15・TK10併行期）に比定できる。前記のようにこれらの竪穴住居には竈は造られない。坂戸遺跡の竈付き竪穴住居は、TK10併行期から川江編年Ⅲ期末（陶邑窯TK209併行期）に比定できるものである。ちなみに坂戸遺跡でもTK47併行期と考えられる竪穴住居では、奈良時代の掘立柱建物跡などに切断されてはいるが、竈はみられず床面に焼土が検出されている。原川遺跡の場合現時点では、川江編年Ⅲ期中葉（陶邑窯TK43併行期）以降の良好な竪穴住居（今回のSB02は約半分が未調査）は発見されていないため、それ以降の状況については不明であるが、坂戸遺跡の状況を勘案すると、少なくともMT15併行期段階では竈は導入されておらず、TK10併行期頃導入され始めたと考えられる。付言すれば、原川・坂戸遺跡を中心とした原野谷川流域の沖積地の古墳時代集落の竈の導入期は、須恵器編年で言う川江編年Ⅱ期（陶邑窯TK10併行期）に求められないだろうか。

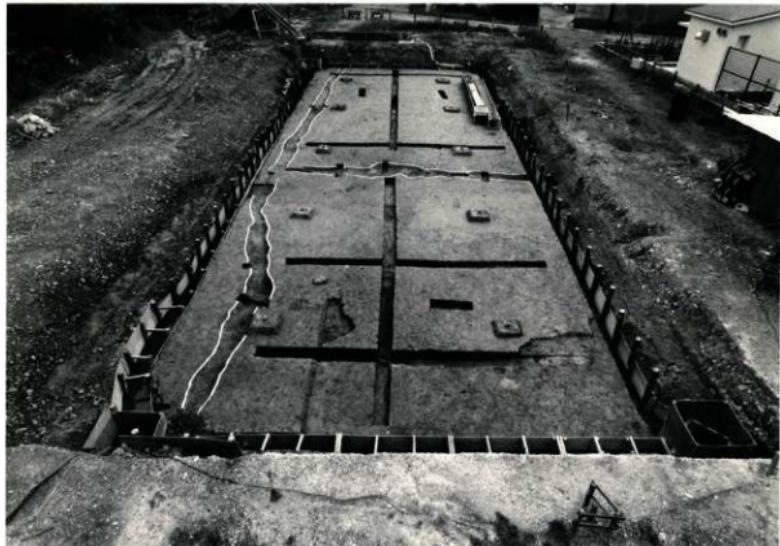
遠江で最も古い時期の竈の調査例としては、6世紀初頭（陶邑窯TK47併行期）とされる浜松市の伊場遺跡例が挙げられる。平成2年に調査された掛川市の六ノ坪遺跡でも5世紀後半と考えられる竈が発見されている。六ノ坪遺跡については、現在整理中であるため詳細は不明であるが、六ノ坪遺跡は丘陵上という立地の違いこそあれ、原川遺跡と約4kmしか離れていない。原川・坂戸遺跡でも今後の調査で5世紀末の竈が発見される可能性もあるため即断はできないが、いずれにせよ当該地域においては5世紀末から6世紀初頭には竈と炉の混在が認められることは確実であろう。遠江においては、5世紀末には竈が導入されていたと考えられるが、導入期の様相は複雑でその普及にはかなりむらが認められる漸移的なものと言えそうである。

以上のように、原川遺跡を含めた周辺遺跡の竈の導入期について若干触れてみた。当該地域をはじめとする遠江地方の古代の竈の調査例は、全期を通じて近年やっとその数を増加しつつある状況下である。そのため導入期、特に5世紀末から6世紀にかけての竈についてもその数は数える程しかなくここで導入期云々は時期尚早の感は否めない。また遺構としての遺存状況の良好なものが少なく、その遺構・形態をはじめとする研究をかなり困難なものにしているのも事実である。従前ではあるが、好資料の増加に期待したい。

《引用・参考文献》

- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 『原川遺跡 I・II』 1988・1989
川江秀季 「静岡県下の須恵器について」『静岡県考古学会シンポジウム 2』 1978
袋井市教育委員会 『坂尻遺跡』平成2年度メロンハウス建設に伴う緊急調査概報 1991
〃 『坂尻遺跡』平成3年度貸倉庫建設に伴う緊急調査概報 1992
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 『坂尻遺跡』昭和63年袋井バイパス（袋井地区）
埋蔵文化財調査概報 1989
〃 『坂尻遺跡』平成元年袋井バイパス（袋井地区）
埋蔵文化財調査概報 1990

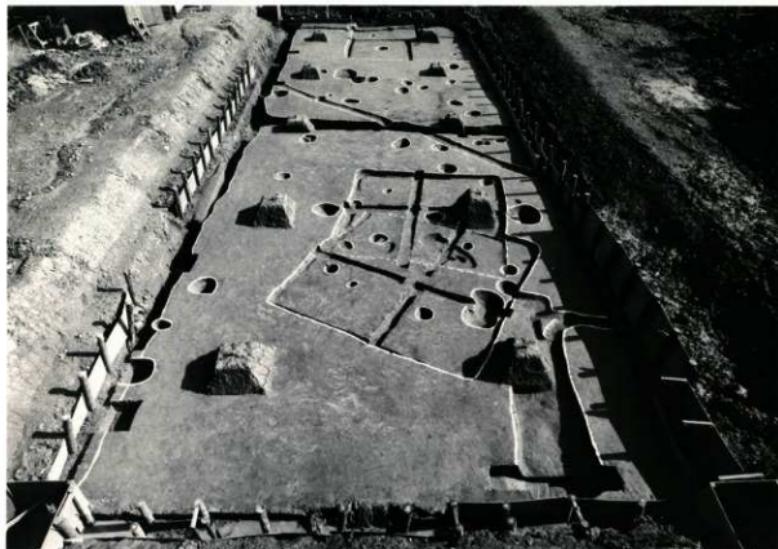
図 版



第1面全景(東より)



第2面全景(東より)



第2面全景(西より)



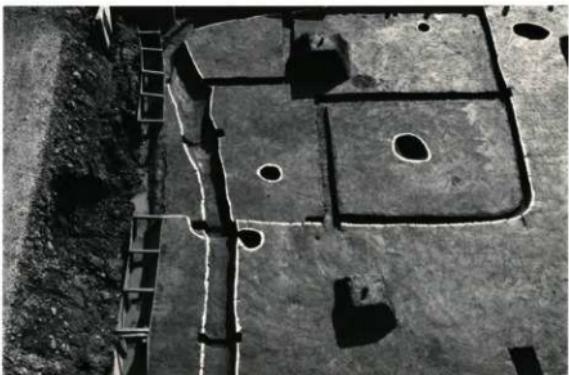
重機掘削風景



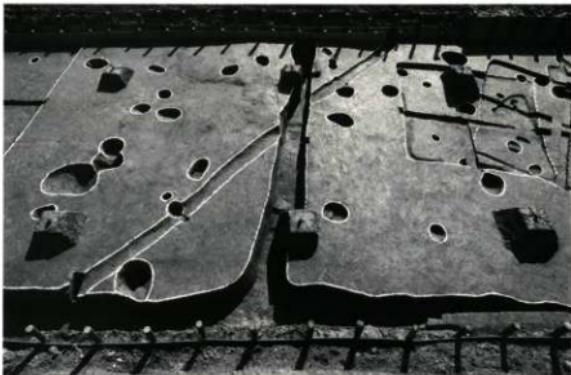
SB03
完掘状況(西より)



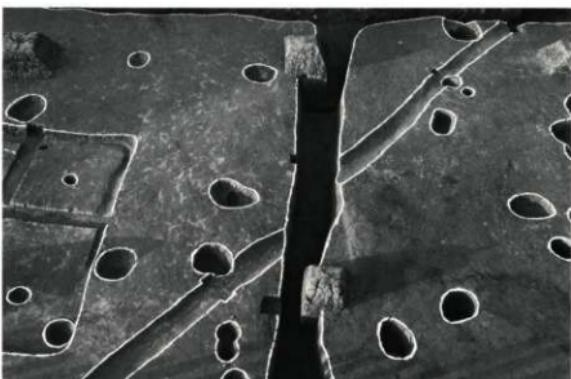
SB01・03
完掘状況(北より)



SB02・SD06
完掘状況(北より)



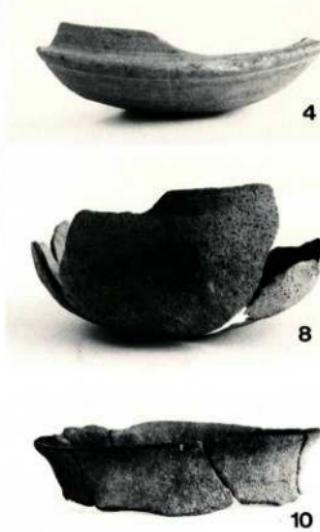
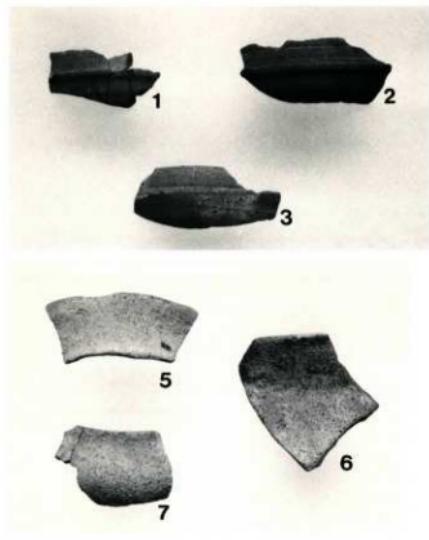
SD03-05
完掘状況(南より)



SD03～05
ピット群
完掘状況(北より)



SD07
完掘状況(西より)







37



38



39



40



42



41



36



43



44



46



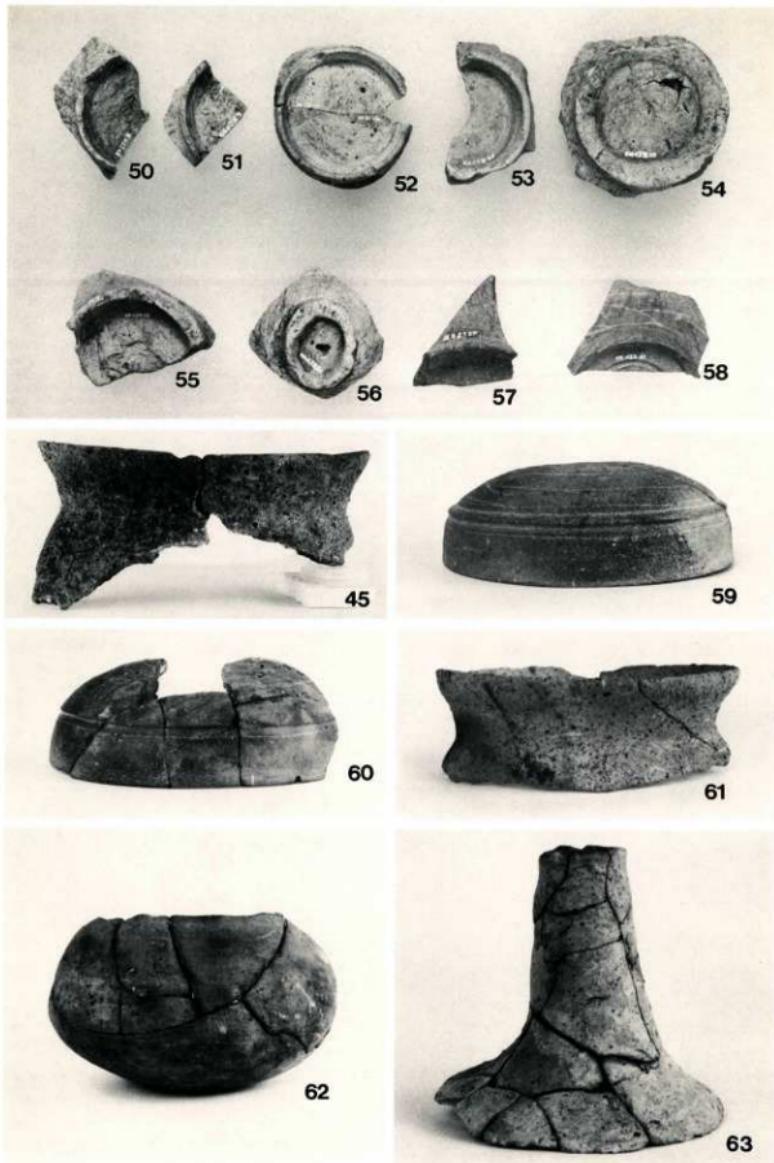
47



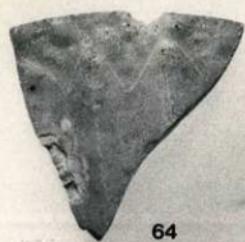
48



49



図版
IX



64



65



66



67



68



69

原川遺跡

原川市営住宅用地建て替えに伴う
緊急発掘調査報告書

平成5年3月31日

編集発行 掛川市教育委員会

掛川市水垂51

TEL (0537) 24 7773

印 刷 株式会社 三 創

静岡市中村町166-1

TEL (054) 282 4031

